

## 復刊事情<sup>1)</sup>

——ハンセン病療養者の著作『選ばれた島』をめぐる——

阿部 安成

(国立療養所沖縄愛楽園遠望 2015.1.26 撮影)

**AOOIKi** ハンセン病をめぐる療養所に生きた青木恵哉<sup>けいさい</sup> (1893年～1969年)は、『選ばれた島』という書名の図書をあらわした療養者として知られている。その刊行はおそらく1958年のことだった。同書の奥付にはどういうわけか、印刷の年月日があるが、発行のそれは記されていない<sup>2)</sup>。

『選ばれた島』にはもうひとつ、1972年発行の版がある。「挿画」(カラー刷り)のある「ジャケット」(カバー)に活字で書名と著者名が印刷された体裁のそれは、手にとり<sup>ひとめ</sup>目みたところで、1958年印刷の初版とはまるで異なる本とみえてしまう。判型は両者同じながら、1972年版の裏表紙には16行の文章が載り、そうした外装もまた初版とは異なる。

初版のひとつづきとなる表表紙と裏表紙(カラー刷り)に、文字は手書きの書名と著者名

1) 本稿は、2014年度後期滋賀大学内地研究員制度、2014年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト研究、福武財団第9回瀬戸内海文化研究・活動助成、日本学術振興会2014年度科学研究費基盤研究(C)(課題番号26370788)による研究成果のひとつである。

2) 本稿はべつに用意している『選ばれた島』をめぐる書史考察の一斑であり、1958年刊行初版については、ここでその詳細を検討しない。

しかなかった。

本稿は、『選ばれた島』のふたつの版を読み、それらのうちであとの発行となる 1972 年版というテキストにあらわれたものを取りあげ、その意味を考えることを課題とする。これは、本 1 冊のふたつの版についての照合作業の記録である。一見たいくつでおもしろくない作業で、その記録は一読これまたたいくつでつまらない文章に見えるかもしれないが、これがわたしにはなかなかにおもしろい作業となった。走り読みすると、稀覯本を改めて世に出した貴重な本にみえかねないこの 1972 年版は、じつに、原著にくわえられた暴虐な仕打ち (*cruel treatment*) ——そのもっとも過剰な力は削除という加工であって、みた眼にはその痕跡が残らない、そのかぎりでおもしろい——を報せる一書だったのである。本稿はその痕をたどる公開の厳密な探査となる。

**AO02Ki** まず手にして容易にわかるふたつの版の違いを確かめよう。カバーの有無、表紙と裏表紙の絵と文字といった外見がふたつの版で異なる。

1958 年版はページをめくると「教母ミス・ハンナ・リデルの霊前に捧ぐ」との献辞があり、つぎに「癩者の慈母／ミス・ハンナ・リデル」と題された彼女の肖像写真、イザヤ書からの聖句の引用、沖縄聖公会管理主教による「推薦の言葉」と彼の肖像写真、「著者近影並に自筆」の一句、そして目次となる。

1958 年版は、目次と本文とのあいだの 1 ページに上下 2 葉の写真を配し、174 ページと 175 ページのあいだにもまた同様に写真、246 ページと 247 ページのあいだ、254 ページと 255 ページのあいだも同様となっている。本文が終わると、「附記」(署名なし)と「あとがき」(恵哉)があって、奥付となる。本文総ページ数 269、印刷者には東京都千代田区神田小川町の坂田好雄の名が記され、また協進印刷製本の名が欄外に見える 1 冊である。

1972 年版は、書名、著者名、編者名が記載され写真が配された扉につづいて、口絵が 7 ページにわたり、総数 21 葉の写真が載る。1958 年版にあった 8 葉の写真はすべて削除されている。

**AO03Ki** ここに両版に載った写真のキャプションをあげておこう。

1958 年版の 8 葉のそれは、「屋我地島愛楽園附近の景勝」「愛楽園の全景」「著者が病友

たちと共に選んで後遂に愛楽園創設の基礎をつくった屋我地島の一角／（現在愛楽園納骨堂附近）「屋我地島大堂原附近の海岸／（手前左くり舟・右阿旦木）」「浮浪病友たちが住んだ自然洞窟の一つ」「著者と病友たちが迫害を避けた「カルバリー島」と愛称したジャルマ島」「愛楽園礼拝堂（祈りの家）と背後現在のモダンな患者住宅／（礼拝堂十字架下は著者の居室窓辺に小さく見えるのは著者）」「愛楽園の伝道に献身する鬼本司祭と筆者／（礼拝堂祭壇前にて）」。

1972 年版のそれは、「クシバル海岸にて」「晩年の著者青木恵哉／愛楽園祈りの家にて」「右から 米原馨児司祭／リデル院主／三宅俊輔院長」「大島療養所西海岸」「回春病院正門」「回春病院男子病室の一部」「上 渡久地港外から見る伊江島」「中 伊江島浜地浜」「下 伊江タッチュー」「昔のライ者の隔離小屋／国頭村にて」「昔の那覇市内バクチャヤーのライ集落 一九三五年」「嵐山から俯瞰した屋我地島」「大堂原突端から見た古宇利島」「ジャルマ」「嵐山事件で名護の町をデモする群集」「上 大堂原の坐りこみの場所に掘った井戸と著者」「中 祈りと学びの場として、戦後、著者が選んだ大堂原裏の自然壕の前で」「下 屋部焼討跡にたたずむ著者」「大堂原に建った MTL 相談所／一九三七年」「大堂原検分風景／右手の丘の下、小屋の建っているところが、最初の坐り込みの地点」「大堂原検分に訪れた沖縄 MTL 理事たち 1936 年」。

両版に掲載された写真には、1 葉の重複もない。あとから刊行された版に、それよりまへの版収載の写真を 1 葉も載せない編集には疑義を感じる。しかもあらかじめここで述べると、1958 年版に載る写真がみせる「くり舟」と「阿旦木」は、『選ばれた島』のなかでたびたび登場する、当事者にとって重要な道具や環境なのだから、あとの版でもそれをみせるに利があったはずだ。そうしなかった編集は、やはりおかしい。

**AO04Ki** 1972 年版は口絵写真について、編者による 14 ページもの「解題」となり、1958 年版にあったリデルへの献辞から著者近影までがすべて削除されて、目次へとつづく。目次をみると、1958 年本文を構成した 29 の章が、1972 年版では第 1 部から第 3 部までにわけられている。それぞれの部の題目は順に「沖縄に渡るまで」「捨てられた島」「選ばれた島」となり、各部の扉には写真が配されている。それらの写真のキャプションは順に、「熊

本回春病院。事務所と院長社宅」「海岸にて。著者」「嵐山からの俯瞰。手前の小島がジャルマ」。29の各章題はというと、読点(,)がナカグロ(・)にかわったり「渡って」が「渡りて」とかえられたりしたほか、なぜか、「恩寵無限」は「恩寵は限りなく」に改められている。本文のページには、初版にはなかった4点の地図が掲載されている(順に、沖縄本島と先島諸島のいくつか、「本部半島西部および伊江島」、本部半島南西部、「屋我地、大宜味付近」)。

初版本文あとの「附記」も「あとがき」も復刊版では削除(ただし「あとがき」は表記をかえたうえでその全文が編者の「解題」に収載)。かわって、1から73までの番号がふられた「注」と「編者あとがき」と『選ばれた島』関係年表がついて、奥付、そのあとに新教出版社の刊行物案内がある。

編者による解題、目次、注、あとがきをふくめた本文総ページ数は298、松濤印刷(おそらく東京所在)によって刷られた1冊である。非売品だった初版と違って復刊版は、定価800円の商品となった。

本文の組み方を対照すると、1958年版は1ページ43字×19行、1972年版は1ページ21字×19行×2段となり、もとより両者は違う版であり、その組み方や部章の編成などがまるっきり違うといつてよい構成なのである。こうした本の編み方(構成)、体裁(外観)、そして装幀(形式)をみれば、これらふたつの版はまるで異なる本なのである。1972年版でその編者は、原著である1958年版を大きく改編、変改したのだ。

**AO05Ki** くりかえせば本稿の課題は、1972年復刊版とはなにか、復刊版編者がしたことはなにか、を問うことであった。

1972年版奥付から同書の書誌情報をみよう。初版発行が1972年11月30日、著者が青木恵哉、ただし青木歿後のこの時点では、同書の著作権は沖縄愛楽園祈りの家にあるようだ。編者が渡辺信夫、発行者が秋山憲兄、発行所が東京都新宿区の新教出版社である<sup>3)</sup>。初

---

<sup>3)</sup> 発行者と発行所についてのかんたんな案内は、阿部安成『島で一ハンセン病療養所の百年』(サンライズ出版、2015年3月)の「V 著書を精査する—青木恵哉」を参照。なお、のちにみる復刊版の「編者あとがき」では当初は同版を教文館から刊行する予定だったと明かされている。編者は同館から著書(後掲)を刊行している。出版社変更の理由は充分

版と異なり、復刊版は編者によって制作された本なのである。

まずはこの1972年版をつくった編者の「解題」を読もう。編者による長い解題は、1.「選ばれた島」復刊の意義」、2.「著者について」、3.「沖縄のライ事情」、4.「ライ者に対する偏見」、5.「救ライの思想史」、6.「本書の成立」、7.「愛楽園設立以後」、8.「復刊本「選ばれた島」について」の8編にわかれている（番号は阿部による。以下各節を番号であらわすこともある）。

以下、編者の表示にしたがって1972年版を復刊版とし、それとの対比で1958年版を初版とするときがある。

「解題」の記述には、編者のふたつの意思が貫かれている。ひとつは、対象を特殊視するということ、もうひとつは、元あったものに手直しをくわえるということである。あらかじめ述べると、これらの編集意思は、特殊なものを、ゆえにそれを一般へと、手直しする、というぐあいに連動しているのである。

**AO06Ki** 解題 1.の記述には大きくいえば、「沖縄県に対する本土の罪責」と「ライ者自身の信仰的使命感にもとづく療養権獲得闘争」を対照するという文脈が埋め込まれている。

「罪責」というかなり厳しい言葉でたどられている、責任を負うべき「本土」が「沖縄県」に対して犯した行為とは、島津藩による琉球王国からの「搾取」、明治中央政府が沖縄県を「最後の後進県として放置」したこと、日本軍が沖縄の「群島を戦場」として県民に「犠牲」をあたえたこと、ついで、第二次世界大戦後の講和条約により沖縄の「群島を手離し」て「内地の繁栄を確保しようとした」ことをいう。そして、「キリスト教会もまた沖縄を差別」したことが特筆されるのである。沖縄伝道を「最も立ち遅れさせていた」状況は、「今日においても」かわっていないとも指弾する。

編者は、「選ばれた島」はそのような見解を持つ人々に新しい開眼をもたらす働きをしてきた」と評価する。ここにいう「そのような見解」がなにか、かならずしも明瞭ではな

---

には示されていないが、新教出版社はよく知られた小川正子の『小島の春』（長崎書店、1938年）に縁があり、その「前身である長崎書店は、ライ関係の出版に関しても傑出しており、故長崎次郎氏は沖縄救ライの真摯な協力者助言者でありましたから、復刊本の版元としてふさわしいと考えます」と記している（「編者あとがき」）。

いのだが、それを付度すると、沖縄伝道の順を遅らせてよいとする判断、沖縄への連綿とつづく重層する差別を省みなかったり、革めようとしなかったりする無配慮や無自覚や無視を指すのだろう。

「アメリカ軍政下」に刊行された初版はそうした意義をもったし、依然として負われなければならない「罪責」が解消されていない「復帰」後もなおその意義は有効であろうから同書を「復刊」するとの宣言に、この第1の節はなった。

一方に位置する「罪責」をいっそう明らかにするものとしてある「療養権獲得闘争」とは、「差別を受けている沖縄の社会の中で、ライ者はさらに差別され、疎外されていた」と編者がとらえた、いわば重層化した差別構造の最底辺から攀じり押し、抉じり開けた隙間から突きだした異議申し立てと抵抗の過程と結実ということなのだろう。

**AO07Ki** 　ただ、編者は、青木が主導した「ライ者集団に沖縄のキリスト者たちが協力し、県当局の権力をもっても建てることができなかつたライ療養所が出来たのである」というのであれば、「そのような見解を持つ人々」とは、本土のものだけでなく、かつ「国家と県」とどまらず、「部落」の人びとも「キリスト教会」もふくまれることを、編者はもつとはっきりと記す必要があつたとおもう。『選ばれた島』には、「有名な婦人雑誌「主婦の友」などは〔中略——引用者による。以下同〕沖縄の人々の非人道的行為を痛烈に非難した」と記されているのだから（以下引用にあたっては、復刊版の当該ページを、復 258、と略記する）。

くりかえせば、重層化した差別構造の最底辺から挑んだ「療養権獲得闘争」のすえに療養所ができあがった、その「経緯をしるすのが本書」なのだと編者がとらえた。だから、編者は、「本書は沖縄やライについての認識を与えてくれるだけでなく、高邁な自立した生き方を教えるであろう。われわれは沖縄を知るためにではなく、沖縄から学ぶために、本書をひもとかなければならない」と「復刊の意義」を説くことができたのである。

「祖国復帰」のその年にはやくも、沖縄に向かう「多くの人の関心は南の島の美しい自然に対するそれであり、浅薄な観光的関心にほかならず」と苦言、あるいは非難を記さざるを得なかつたからこそ、いまも依然としてしばしばいわれるとおり、鏡としての沖縄か

ら学べ<sup>4)</sup>、と編者は命じたのだった。

沖縄をめぐる差別構造のその最底辺に押し込められた「ライ者」が「療養権獲得闘争」の成果をあげたがゆえに<sup>5)</sup>、その実行者があらわしたという著書は、高雅な記録へとまつりあげられたのである。

**AO08Ki** 「著者について」と題された節では、「その生涯については本書の記述そのものが詳しいが」と留保をつけながらも、その「要約」を示そうとして、わずか 20 行のこの節に 7 回もの「伝道」の語を記して、四国や沖縄での青木の事蹟をあらわした。だが、本書の記述そのものにあるとおり、青木がとりわけ沖縄の各地でおこなったことは「伝道」とどまってははいない<sup>6)</sup>。すでにべつ<sup>7)</sup>の機会（前掲『島で』）に示したとおり、そこでは生活改善が青木の重要なひとつの活動となっていたと、『選ばれた島』は伝えているのである。

『選ばれた島』の著者について説くこの節において、同書の読みとりの不充分さがうかがえ、これは、つぎの節「沖縄のライ事情」の記述にもみられる。

その節でまず編者は、「最も美しい自然をもっている沖縄県は、今日なおライの最濃厚県である」と、「美しい自然」と「ライの最濃厚」との対照をみせる<sup>7)</sup>。この 1 文のつぎが、「日本本土におけるライ発病者が近年ほとんどなくなったのにやや遅れて、沖縄県におけるライ発病もやがてなくなる」——急ぎつけくわえると、これは、発病者が亡くなった、といっているのではない、いなくなった、ということ。念のため——との 1 文があり、ついで、「そして、沖縄では占領時代に進歩的なライ政策をとったため、社会一般のライ問題

---

4) このレトリックがもつ陥穽については、知念ウシ『シランフナー（知らんふり）の暴力—知念ウシ政治発言集』（未来社、2013 年）所収の「空洞の埋まる日」（初出 2002 年）を参照。

5) 初版著者自身が「どん底」の形容を用いている（第 8 の章題）。

6) 初版著者自身が記すところをとりあげると、「もとよりわたしの使命は伝道にある。しかし、伝道一点張りの頃はわたしを避けていた彼らが、病気のよき相談相手になってもらえると、進んで近づいて来る事実と直面して、わたしは新たに洋々たる道が開けた思いがした。病気の相談を受けながら彼らを信仰に導く、それは確かにすばらしい方法である」（復 154）。

7) そう記した編者は無自覚なのだろうが、これでは自然が美しい沖縄なのになぜ癩が濃厚なのかということとなり、ここには美醜の対照があることとなりはしないか。さらには癩が濃厚なところは美しくはないはずだ、汚いところにちがいないとみることもなる。なお、わたしは編者がそう述べたといっているのではない。さきに引用した言のひろがりやを想定してみせたのである。

に対する啓蒙は本土よりも進んでいるように感じられる」との1文がつづく。「今日なおライの最濃厚県」と記したすぐあとに「沖縄県におけるライ発病もやがてなくなる」と示されても、ではいったい、いま、どうなっているのかがよくわからない記述となっている。それをひとまずおいても、ここではくりかえし、「日本本土」と「沖縄県」との対照をあらわすことに重点がおかれているのである。過去にさかのぼっても、「他府県においては発病者数が減少しつつある昭和初期、沖縄ではむしろ増加の一途をたどっていた」というのである。その根拠や典拠はまったく示されていない。

**AO09Ki** 沖縄の「県全体からいって」も、「本島北部、すなわち国頭（くにがみ）郡」は特別なところで、「平地は少なく」、当地での「労働は苛酷であり、食物は極めて貧しかった」とみせられる。ここではさらに、「一九六九年、琉球政府文化財保護委員会が発行した「沖縄の民俗資料」<sup>8)</sup>を典拠として、食事情が説かれ（といっても、「沖縄」のどこのそれなのかは明瞭ではなく、したがって沖縄一般の民俗なのか、それが本島北部にもあてはまるのかわからないのだが）、「こういう苛酷な生活条件のもとで、ライの発病率が高くなったのである」と指摘して、「著者〔青木〕が病者を訪ねて伝道しつつ歩いたのは主としてこの北部地方であった」とその地域の特殊性が記述されたのだった。しかも、食事情→苛酷な生活条件→高発病率と論述したそのすぐあとに、「七七ページにある野草入りの汁を参照されたい」と解題らしく本文を参照させる。だがその77ページには、「野草」も「汁」もその文字がまるでみえない。

それらの語は、正しくは、78ページにある。参照すべき箇所はページをめくったつぎだった。適当で、いいかげんな解題だ。参照箇所の誤記を読者が直して指示ページのつぎをみれば、現地の食事情が記されてはいるが、それをとらえて「苛酷な生活条件」だと著者は述べていないし、ましてそれが「ライの発病率が高くなった」要因だとも説いてはいない、とすぐにわかる。そこには、せつかくの「好物」である「菜っ葉」の「お汁」も、当

---

<sup>8)</sup> 国立国会図書館 OPAC と沖縄県図書館横断検索みーぐるぐるサーチで検索したところ当該図書はヒットしなかった。たとえば沖縄県立図書館が提示している関連書の書誌情報はつぎのとおり——琉球政府文化財保護委員会監修『沖縄の民俗資料』第1集（琉球政府、1970年）。



地の食風である「豚の油」入りでは「油っこくぬるぬるして気持が悪」く、「口に合わぬから」と「箸を置き」てしまったことが記録されているにすぎないのだ。

これは読みとり不足というよりもじつに読み誤りであり、この記述不正確、根拠薄弱、参照不適切な憶測をとおして、ここに沖縄の特殊性がいたてられたのである。

**AO10Ki** さてここで、『選ばれた島』本文にみえる、青木が観察して記録したとなる食のようすを確認しておこう。

まず、さきに青木が辟易した豚の油入り菜っ葉の鍋をめぐっては、やがて、「わたしなども最初の内こそあぶら気の多いものは嫌いだったが、いつの間にか好きになってしまった」と、「暖かい地方に住みなれると生理的に自然あぶら気を要求するのか」と、その慣れが自覚されることとなると明かしているのである（復 149）。

もとより潤沢に食糧があったわけではなく、「温かいご飯と豆腐一丁の夕食は病友たちばかりでなく当時のわたしにとってもまた豪勢なものだったのだ」（復 133）。だが、編者が民俗資料を参照したとしながらも「解題」にはもりこまなかった食糧が、青木の活動範囲にはあった。それがいわゆる「海の幸」で、病友たちは、「たこ、まいか、鰻、その他いろいろの魚をもり一本でとらえてくる」（復 96）、「彼らはまた魚を捕るのが上手である。〔中略〕わたしも新鮮なサシミをたらふく食べた」（復 83）、海の「浅いところでは牡蠣もよくとれたし、三月から四月にかけては、あおさ、もずく、つまたなどもいくらかでも採れた。しかしわたしたちが獲ったものは買手がないのだから、必要量だけ獲ればさっさと引き上げるのが常だった。〔中略〕主食はさつま芋でも刺身、酢のもの、焼魚などと海の幸は豊富であり、心一つに談笑しながらの食事は実に楽しかったものである」（復 97）、「肉はなかなか美味」な海亀も、「卵の味は家鴨の卵とよく似ている」海亀の卵（復 169-170）もある、と『選ばれた島』に記されているのである。

**AO11Ki** それだけではなかった。土地の慣行、あるいはそれこそ「民俗」が病者を餓死させないと『選ばれた島』は記録していたのだ——「ライ者の怨みをこうむるとライになる。「飢餓苦」（やーさくりさ）は苦しみの中で一番大きなものであるから、ライ者をこの大きな苦しみにあわせるとその怨みはてきめんで、「恨み癩」になる」、この「恨みライ（う

らみかんち)」を「怖れて人々は彼らが戸口に立つと必ずなにか恵んでくれる。〔中略〕「お蔭でわたしたちは餓死する心配はありません」と彼らはいっていた。／特に冠婚葬祭の家にでもぶつかると、かまぼこ、カステラ、砂糖、天ぷら、肉、里芋でんがく等の御馳走をどっさり貰ってきたものだ」(復 94) というのである。

同様に、「部落からふかし芋を貰って来たのだ。三人で食べるに十分な量である。〔中略〕そしていつか他の浮浪病友がわたしたちは歩けるかぎり餓死する心配だけはあります、といったのを思い出してなるほどと思った」(復 132) との記載もある。

もとよりそうした施しは常時のことではなかったろうし、「物乞い」に泥むことは避けたほうがよいという生活改善への馴致も青木の望むところだった——「みんなが協力して自分たちの生活を自分たちの力で維持する。〔中略〕第一物乞いをする者もいなくなる」(復 138) というぐあい、で、「乞食をやめて自活させてみよう」と想定する耕作では、「努力次第では甘藷も野菜も十分つくれそうだ」との見通しがあつてのことだったのだ(復 186)。

**AO12Ki** わたしは、沖縄の食がどうなっていたのか、とりわけ療養者のそれがどうだったのかの事実を問うてはいない。『選ばれた島』を読めばだれでもわかるとおおり、「思わぬ海の幸」というからには常ではなく稀ないわばごちそうであったとしても、「おびたしい鯉の群が海面を掻き立てながら渚に突進してき」て、そのうちの「十数尾が干潟にはね上がり、それを「新鮮な刺身」にして食べたことが記され(復 272)、また、根気と努力によって「葉菜、根菜、果菜、何でもよくできた。砂土だから西瓜の成績は特によく、大きなやつが畑のあちこちにころがり、食べきれないくらいであった」という充足もまた可能なのだと著者が記していたのである(復 273)。

「解題」を執筆する編者は、当然のこと、『選ばれた島』を読んでいるのだろうから、「一九六九年、琉球政府文化財保護委員会が発行した「沖縄の民俗資料」を読むというお勉強をしたうえで、『選ばれた島』をどう読むか、理解するか、あるいは、読んだうえでなにを考えるのかを説くのが、その務めではなかったのか。

編者が、『選ばれた島』は、「われわれ」が「沖縄から学ぶため」に読むべき書なのだというとき、なにを「学ぶ」かはすでに自明であつて、それは沖縄が特殊であること、その

沖縄を「日本本土」が差別していること、なのだった。沖縄と本土日本との対照が前提にあり、後者が前者を差別、抑圧する事態を憂え、それを論難する場でなお、沖縄は特殊に仕立てられるのである。「沖縄を知るためにはなく、沖縄から学ぶために、本書をひもとかなければならない」と宣言する編者はまず、自分が「沖縄を知る」ための手立てをきちんと整えるところを始まりとしたほうがよい。

**AO13Ki** 解題 4.「ライ者に対する偏見」でも沖縄の特殊化が記録される——「沖縄では人情が厚く、部落内に関する限りでは病者はよく保護され、とくに同族・同門内の病者に対する保護は手厚い」という。さて、『選ばれた島』でそれをどう記録しているか。それはここではおいて、さらに「解題」のつづきをみると、逆接、あるいは限定の記述となっている——「ただし、援助の手を伸べる側の生活条件が前述のようにきびしいから、病者が放置される場合もまれではない。この場合、病者はいわゆる浮浪ライとなる。浮浪ライに対する憐みも比較的深く、人々はできるだけの施しをその貧しさの中から行なっていた」と記す。

これでは、人情が厚いのか、人情が厚くても生活条件が厳しくて援助が発現しないのか、それでも憐みからぎりぎりの施しをする人情の厚さがあるのか、なにがどうなるのか、よくわからない。また、『選ばれた島』に記録されている「恨みライ」にはまったくふれもしていない。

ついで、部落内、同族、同門の病者ではなく、「他部落出身のライ者が自分たちの領域に住みつくことに対する拒否は、他府県に見られぬほどきびしい。〔中略〕沖縄における〔療養所設置への〕反対のはげしさはその比ではない」と、やはり沖縄の特殊性がことあげられるのだった。編者の記述には、病友のなかでも秀でていたと評価するその気高さを学ぶべき対象（青木）が活躍した場所は、ほかとはくらべものにならないほどに過酷な環境だった、という筋立てがあるとみえてしまう。

**AO14Ki** つぎの解題 5.「救ライの思想史」では、対象を特殊視する観点はよりいっそう明瞭で、もとより、「ライは病気のうち最も悲惨なものであった」というのである（その根拠は示されていない）。だから「救ライ」の精神が説かれることとなり、「救ライ」は「ラ

イという病気の特異性を前提」とし、仏教であれキリスト教であれそうした宗教の「精神的基礎」が「救ライ」を推進したと説いているようにみえる。

しかも日本の近代国家は、「先進諸国」との対比でみずからの後進性を自覚するがために、「浮浪ライ」の「強制収容」や「ライ部落の弾圧」を実施したのだから、「政府の考えとは全く逆に、ライ者を人格として重んじる基本的姿勢から発するのが、救ライの本来の意義であろう」といいながら<sup>9)</sup>、しかし、「いま、その本来の意義が救ライ事業において全うされているかどうかの検討はしない。また、救ライの精神的基礎としてキリスト教がどうかかわるかについても論じない」と宣告して思考を途絶させている。1972年の時点で、「救ライ」とキリスト教とについての検討や考察は、放棄されたのだ。

ハンセン病をめぐる事態について、人権の観点からのまとまったルポルタージュや論述は、三宅一志『差別者のボクに捧げる！—ライ患者たちの苦闘の記録』(晩声社、1978年、増補版1991年)、川上武『現代日本病人史—病人処遇の変遷』(勁草書房、1982年)を待たなければならなかったし、さらにキリスト教による病者救済への批判はとなると、荒井英子『ハンセン病とキリスト教』(岩波書店、1996年)がほぼ嚆矢となるのだった<sup>10)</sup>。

このかんおよそ四半世紀のあいだ、療養所のなかにある教会堂のなかで、信徒たちはどのように信仰をあらわせたのだろうか。ここでわたしは信仰の証しの内実を問うているのではない。わたしの知る療養所の教会堂には、療養者と来訪者とを隔てる境界があったと聞き、それが写る写真をみた。祈りの場に境があったその終期がはっきりしないのだが、1972年から1996年までのあいだにはそれがあったこととおもう。わたしは信仰をあらわす場所のかたちを、牧師や神父、そして教会がそれをどうつくりあげていたのかを、牧師も神父も教会もみずからで自己検証したかどうかを問うているのである。

---

<sup>9)</sup> ただし編者は「当局の施策の非人間性を追及するだけでは何にもならない。このような政策は一人一人のもっている差別意識の集約ないし反映にほかならないからである」(解題5.)との見解を示しはしたものの、やはりその議論は展開していない。この論点はまず新聞記者によってとりあげられることとなる(後掲三宅一志の著書参照)。

<sup>10)</sup> 荒井の著書への批評は、阿部安成「病むからだ、信ずるころ—ハンセン病の療養所におけるキリスト教信仰をめぐるいくつかの論点」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.206、2014年1月)を参照。

**AO15Ki** 解題 6.「本書の成立」はその冒頭に、復刊版の掉尾から削られた初版著者による「あとがき」を転載している。それは原文のとおりではなかった。ここには復刊版編者が、『選ばれた島』本文にくわえた改編、変改の萌芽ともいうべきようすがうかがえる。それはのちに検討するとして、編者がいう「著者のことばを少しく注釈した」ところをみよう。

まず、初版著者が同書を執筆するきっかけをあたえたという人物についての説明がある。ついで初版刊行にいたる経緯を補足する——「著者が最初書き上げた原稿の一部は、遺品として愛楽園内に保管されているが、筆跡をみれば、半分は著者自身、半分は徳田祐弼氏が著者の口述を筆記したものであることがわかる」という。この口述筆記についてとその筆記者の名は、初版「あとがき」には記されていなかった。

さらには、初版著者の記述が訂正される——「この原稿が「かるばりの道」と題されたと著者は言うが、正しくは最初の<sup>〔マ〕</sup>標題は「阿旦葉（あだんば）の蔭に」であつたらしい」といいはするも、ただし、「最終的に標題がきま<sup>〔マ〕</sup>ったいきさつについては著者のいない今日、確かなことはわからないが、「選ばれた」以前には「捨てられていた」ことが言外に意味されている。捨てられた島沖繩、ジャルマ、屋我地、それが「選ばれた島」となるように、捨てられていたライ者が、恵みに浴すべく選ばれた器だったのだ」とくわえる。

この言外の意味をくみとって編者は、29ある章を3部構成にわけたうちの第2部に「捨てられた島」と題をつけたのだろう。そのつぎの第3部が書名と同じ「選ばれた島」となる。わたしには同書の文脈にしたがえば、選ばれる以前は、たんに、選ばれなかつただけ、とおもえるのだが。選ばれるまえは捨てられていたのだ、とは過剰な読み込みである。

**AO16Ki** 初版著者「あとがき」には、青木の原稿を「整備せられ、脱稿するにいたつた」功労者の名が記されていた。正確には、それは活版による印刷部分が塗りつぶされ、その右わきの行間に「宮良保」と（おそらくスタンプで）印字されていたのである。それを復刊版編者は、「この原稿を書物の形にするためにリライトした宮良（みやら）保氏（旧版では新垣<sup>〔マ〕</sup>〔あらがき〕政治となっている）は、愛楽園入園者中最高の学歴を有する知識人であるが、文字通り身を惜しまぬ協力によって約二か年をついやして原稿を完成し、ついに

そのために失明して現在にいたっている」とも伝えている。

復刊版に収載された初版著者「あとがき」をみると、その人物の名は「新垣政治」となっている<sup>11)</sup>。その心身のぐあいについては、「昼夜兼行、原稿と取っ組んで書き、努力をつづけるうち、眼疾によって視力を冒され、一時は原稿よりも氏の健康が気遣われたのであるが、一年有半の静養によって回復し、再びペンを執ってこれを完成させたのである」となっている（初版も読点の有無、漢字表記の違いをのぞけば同じ）。

青木は『選ばれた島』の刊行から11年後に亡くなっている。そのかんに新垣=宮良が失明したのかどうか、よくわからない。初版の「あとがき」には失明について記されていないから、それは青木歿後のことなのだろうか。なんとも曖昧なところである。

ともかくも、初版も復刊版もどちらも、『選ばれた島』は青木ひとりの執筆ではないと明記しているのである。

**AO17Ki** 「愛楽園設立以後」と題された解題7も、青木の原稿についてその節の記述を始めた。初版著者「あとがき」に記されたとおりに、また本書本文を読めばわかるとおりに、その記述は1938年の愛楽園の「誕生」、べつにいえば、沖縄MTL相談所の「政府に移管」までとなっている。「最初の原稿には、戦中から戦後の復興までのことが収められていたというが、愛楽園設立以後の分の原稿は散逸してしまった」と、初版著者「あとがき」にはみえない原稿散逸について復刊版編者は伝えている。原稿がもはやないために、「その部分をもとに、本書の続篇を出版することを願っていた」という著者の希望は断たれ、もうひとつ、「本書が外面の歴史であるのに対し、内面の歴史を綴った続篇を書きたいとの願いが〔著者には〕あり、その原稿らしいものが少しく残っている」とはいうものの、「著者のとらえた資料はあまりにも少なすぎるから」、これまたその望みはかなえられないと編者が断言したのだった。

青木による原稿についてももういちど確認しておこう。復刊版編者「解題」によると、1972年ころに国立療養所沖縄愛楽園内で保管されている原稿の一部に見える筆跡は青木と徳田

---

<sup>11)</sup> 阿部が古書店で購入した初版も沖縄愛楽園自治会が所蔵する金城幸子旧蔵初版もその「あとがき」には新垣の名が塗りつぶされて宮良の印字があるが、石居人によらずと沖縄県立図書館所蔵初版に塗りつぶしはなく、新垣の活版印刷がみえるという。

のもので、そこに園設立以後の分は散逸によりふくまれず、他方で、青木自身が望んだという「内面の歴史を綴った続篇」のものとおもわれる原稿が少し残っていることとなる。

ただ、この「外面」「内面」という区分が青木の言葉そのままなのかはわからないし、いまある『選ばれた島』が初版であれ復刊版であれ、それが「外面の歴史」であって「内面の歴史」ではないとは、わたしには読めなかった。そこには、著者なるものの信仰のこと、恋愛のこと、といった「内面」が明かされているという単純な理由による。

**AO18Ki** さて、解題7は、おおよそ1972年時点での原稿の状況を記録しただけでなく、原稿が欠落しているという療養所開設以後の歴史を記述している。

沖縄MLT相談所の開設（これは臨時国立癩療養所国頭愛楽園設置の前年1937年のはず）以降は、青木には「沖縄島全島を股にかけた往時の活躍はもはや見られない。園外との接触もなくなった」という。1年の違いではあるが、愛楽園ができるまえにすでに青木は、それ以前ほどの「活躍」はしていなかったというのである。依然として地元民の「相談所に対する感情はなお険悪」だったにもかかわらず。もはや、「全島を股にかけ」るほどの大きな課題がなかったのかもしれないが。

国立移管後には、「キリスト者」である園長たちが着任し、「国立の施設ではあるが、キリスト教的雰囲気濃厚」で、青木が「入園者の精神的指導者」であり、しかしそれゆえに「園当局に対して不満を抱く新入患者は、著者〔青木〕にリンチを加えたこともあった」という。施設内でなお、青木の生きる環境は苛酷だったのだ。

「極度の国家主義者」であった二代め園長の赴任により、「著者青木恵哉は〔中略〕最大の苦難に会う。園長は著者をスパイと見て迫害した」ほどであった。敗戦後に三代めの園長が就任するとその迫害はなくなり、またプロミン投与が始まったものの、「晩年期」となった青木は、「苦難の時ではなかったが、試練の時」を過ごしたという——「肉体的・精神的に老化し、新しい状況に対してもはや往年のような指導力を発揮することができなかった〔中略〕内に残る虚無的な危機の克服が難問題」となり、「晩年の著者は園内では疎外された老人であり、かれを重んじる人は数人しかいなくなった。戦後、本土に渡ったとき、本土療養所で示された手厚いもてなしと尊敬を思うにつけ、愛楽園における不遇をかこつ

愚痴が次第にふえた」とその軌跡をたどりはするものの<sup>12)</sup>、「愛楽園開設後の著者の「余生」について、人は冷淡な批評をすべきでない」と、編者はいわば釘を刺す。

このあたりの記述の典拠もまた示されていない。青木に「師事」したものが伝える青木自身の「述懐」が引用されてはいるのだが、「疎外」「不遇」「愚痴」「余生」がだれによる表現や形容なのかは不明瞭にすぎる。

この節では、「戦中、戦後の愛楽園の歩み」を報せる資料として、「沖縄タイムス社編『沖縄の証言』（一九七一年）、愛楽園編『愛楽園三十周年記念誌』（一九六八年）」があげられているだけで、戦時下の療養所と青木を描いた、三浦清一の『愛の村—沖縄救癩秘史』（鄰友社、1943年）には一瞥もくわえていない<sup>13)</sup>。もっとも同書が「小説」だからというのであれば、そう断ればよいだけのことなのだが。

**AO19Ki** 「解題」最終節は「復刊本「選ばれた島」について」と題された。その冒頭で、「本書は初版本の忠実な翻刻ではない」と示す。ではなにか——「広く読まれることを願って刊行される本書は、その方針のもとに編集しなおされた」のだが、ただし、「ごくわずかりライトされただけ」だという。その理由は、「古典的な意味を獲得した本書は、もはや書きなおさるべきではない」からとのこと。本書への敬意、古典というべき『選ばれた島』と題された本への尊重の意思が、ひとまず、あらわされている。

では編者はなにをしたというのか——（あ）「漢字を少なくし」、（い）「読みにくい固有名詞に「ひらがな」を添えた」、これらの変更はわずかな「程度」にすぎないということなのだろう。だがすぐに「ただし」と接続詞を打つというには、「救ライ史の古典に属する書

---

<sup>12)</sup> ここにいう「本土療養所」での厚遇と尊敬をうかがわせる写真が沖縄愛楽園自治会に残っている。そこには青木がかつて暮らした香川県大島の療養所にいわば里帰りしたときや大阪や富士河口湖へ旅行したときに撮られた写真、また大島の在園者や職員がそこで写した写真があった（この写真の一部を、阿部、石居監修、解説『選ばれた島』リプリントハンセン病療養所シリーズ1、近現代資料刊行会、2015年3月刊行予定、に収載した）。

<sup>13)</sup> 沖縄県立図書館が示す書誌情報によると、沖縄タイムス社が1971年に編集発行した『沖縄の証言』は上巻で「激動の25年誌」の副題があり（下巻は1973年編集発行）、沖縄愛楽園が1968年に編集発行した記念誌の書名は「開園30周年記念誌」となっている。もう1冊「解題」で参照された文献の『沖縄救癩史』（1964年）についても「二六四ページ」とある総ページ数は246。復刊版編者には書誌情報を正確に記さない癖がある。なお、三浦の伝記に、藤坂信子『羊の闘い—三浦清一牧師とその時代』（熊本日日新聞社、2005年）がある。ただし三浦の著書である『愛の村』にはほとんどふれていない。



物『選ばれた島』のこと〕に仮名（初版においては病者の名はほとんど全部仮名であった）人物を登場させては資料としての価値がなくなるので、人名はみな調べて実名になおし、それに伴い文章を書き直す必要の生じたところはなおした」というのである。行がえのうえつづけて、「このように、原形をなるべくとどめたため、必要な説明はすべて注の形にして本文の後に収めた」ともいう。

この編者の記述には全体に、いったん記したことがらをそのすぐあとでそれとは異なる、あるいはそれとずれる内容をあらたに記す癖がみえる。「ごくわずかりライトされただけ」「もはや書きなおさるべきではない」という語法にも、リライト、書きなおし、と語をかえて、その実態を曖昧にしてしまう効果があるようにみえてしまう。

変更点は、（あ）（い）といった「程度」にとどまらず、（う）実名表示、（え）後注の追加、といったところにもおよんでいると編者みずから明らかにしたのである。だがわたしには、「ごくわずかりライトされただけ」「もはや書きなおさるべきではない」「原形をなるべくとどめたため」ということと、実名表示に「伴い文章を書き直す必要の生じたところはなおした」ということとの整合性がよくわからない。（う）（え）の作業であれば、それは、校訂、をおこなったときちゃんと明示すればよいだけのことだ。なお、後注には実名表示にかかわる説明以外にも歴大な情報が記されている。

**AO20Ki** じつはもっと「書き改め」たかった、とうけとれるじつに率直さを滲ませた記述が復刊版にあった——初版は「原稿は一旦著者の手を離れて宮良保氏によって書き改められたのであるから、今回も書きなおす余地はあったかもしれないが、編者は原著者によってオーソライズされる機会がないのに、書き改めることはすべきでないと思う」<sup>14)</sup> といふところが、編者の率直な見解となるのだろう。前例があるのだから書き改めは不可ではないが、でも原著者がいないからやめておこう、ということだ。当初の予定にあった青木の「存命中に「復刊する」のであれば、「いくつかの点で大幅の改稿をしたかもしれない。

---

14) すでに記したとおり初版著者「あとがき」では「新垣政治」の名が塗りつぶされたうえでその隣に「宮良保」の名が印字され、復刊版に転載されたその「あとがき」では新垣の名があったので、新垣が実名、宮良が療養所通名となるはずなのだが、なぜここで復刊版編者は実名の新垣と記さなかったのか。その理由がわからない。

少なくとも著者とよく話し合ったと思われる個所がいくつかある」との前置きにつづけて、編者はそれを2点あげた。正確を期して当該箇所を長く引用しよう。

一つは皇室についての著者の考えである。終戦時までは、ライに無理解な民衆や官憲に対し、「皇室の御仁慈」とくに貞明皇太后の「お歌」を持ち出すのは最も有効な手段であった。それを有効な手段として使うほかなかった善意の弱者について、今とやかく言うべきではない。しかし、「十坪でもいい、一坪でもいい。そこに立っていれば誰からも文句を言われぬ土地がほしい」というギリギリの要求から、ライ者自身の療養権獲得闘争としてかちとられた療養所と、皇室の御仁慈が矛盾しないであろうか。しかも、このライ者集団がキリスト教を指導原理として成立しており、祈りに支えられているのに、皇室の御仁慈にすぎるように言うことは矛盾ではないだろうか。

——ここには、よくわからない文が連続している。第2文にいう「持ち出す」のはだれか？、また、そこにいう「最も有効な手段であった」とはだれによる判断なのか？、この断定と第3文にいう「有効な手段として使うほかなかった」という理解とのあいだには、かなりの隔たり、あるいは、深い曖昧さがあると、わたしはおもう。「最も有効な手段」を使ってなにが問題なのか、それこそまさに、傍で「とやかく言うべきではない」。

編者は、当事者の闘争と皇室の仁慈とのあいだに、キリスト教の祈りと皇室の仁慈への報恩や報謝とのあいだに、「矛盾」をみたのである。とはいえ、この点について「大幅の改稿」はしなかったというのだ。

つづけてもうひとつの点をみよう——「今一つ死者の霊の問題がある」といい、沖縄で見られる「死霊崇拜」と「十字架の贖い」とのあいだに、やはり「矛盾」があるとの指摘である。両者のあいだに違いや対立があるだろうと、わたしもおもう。信仰のないものの傍目には、これは死生観、ひいては世界観の違いなのだから。だが、編者のようなおそらく信徒はそうした「観」の違いとはみないだろう。つきつめれば、世界のありようそのものが異なるというはずだ。そうなるはずの編者の指摘は、わたしからすれば、地球で生きられる人間が火星では生きられない、ここには大きな矛盾がある、というに等しいと感じる。いうも詮ないことではないか。それはともかくも、この点についても「大幅の改稿」

はしなかったはずなのだ。

皇室と死者の霊、この2点をめぐり、編者の強い信仰心があらわれているとみえる。

**AO21Ki** ここで、巻末の「編者あとがき」もみておこう。編者による「解題」には、「著者とよく話し合っ」ていないと読みとれる記述がある、とわたしは読んだ。巻初の「解題」に初版著者がすでに故人であることが記されていたが、復刊をめぐる著者との交渉について記載がなかった。よく話しあってははいないその理由を示すかのように、編者は青木に会うことはなかったとこの巻末で明かされたのだった。「まだ沖縄渡航がむずかしかった頃」だからというのではあるが、「編者あとがき」にも記されている、『『選ばれた島』復刊のためのわたし〔編者〕自身の準備作業であり、また『選ばれた島』の読者のための手引きでもあった』という『沖縄ライ園留学記—non-fiction 愛と希望の記録 7』（教文館、1970年）<sup>15)</sup>には、その執筆にさきだって、「一九六九年の六月と一二月と七〇年の七月」の3回にわたる渡沖をしていたと記されていた。青木逝去から3か月のちの訪沖である。もう3か月はやく沖縄へゆけばよかったと強く悔やまれたことだろう。『選ばれた島』をめぐる編者は、「最晩年」の青木との「文通」を交わしたという。ただその具体相や内容は示されていない<sup>16)</sup>（なお、「解題」では「著者」と記すことが多かった青木を「編者あとがき」では「青木先生」「先生」とも記している）。

巻末の「編者あとがき」は、巻初「解題」にあった「復刊本「選ばれた島」について」のつづきのようでもある。復刊版に「地図や写真や注をなるべく多く入れようとした」その理由を、「読者に、ことがらを少しでもよりよく具体的にとらえていただきたかったから」と述べ、さらにその前提となる自分の『選ばれた島』読后感想をあげている。どういう読書体験だったかを確かめるために、長い引用をしよう。

---

<sup>15)</sup> 「編者あとがき」には「教文館出版部」と記されているが、発行所名は同書奥付の表記にしたがった。同書とそれに先行する同人の著書『ライ園留学記—non-fiction 愛と希望の記録 1』（教文館、1968年）の奥付に記された著者略歴には「京都大学文学部哲学科卒業後伝道者となる／現在日本キリスト教会東京告白教会牧師。東京女子大学講師」とみえる。くりかえせば復刊版には編者の紹介はない。

<sup>16)</sup> 前掲『沖縄ライ園留学記』によると青木からの最初の手紙が復刊版編者に届いた時期は青木逝去の前年1968年末のようである。翌1969年2月の手紙が最後となったというからその「文通」の期間はせいぜい2か月ほどだったこととなる。

この本をはじめて読んだとき、わたしは当然、非常に深い感銘を受けたのですが、精神的なものだけしか読みとってはず、いわば色彩のない絵、ないしは抽象画のようなものとしてこの書物をみていました。これではこの本の復刊を推進する力が十分には湧いて来ませんので、わたしはこの本に書かれていることが皆、わたしの心の中で、いきいきとしたイメージにならなければならないと思いました。

と、とても編者の素直さがうかがえる説明をくわえていた。ただ、すでに本書巻頭の編者解題を読み、そこに記された「ここに装いを改めて復刊されるのは、著者と関係者の願望だけによるのではない。むしろ、本書の内容そのものの力がこうさせたと言うべきであろう」の記述を覚えている読者は、一瞬、本書の内容をどう読めばよいのか途惑ってしまうだろう。「本書」に読者を惹きよせる力があつたのかどうか、と。

**AO22Ki** いや、その内容は不変であつて、読み方に、あるいは読むものの読解力にこそ問題があるのだということなのか。だからこそ編者は、「著者が歩いた道をわたし自身も実際に歩いてみよう」と努力した」その甲斐あつて、「この書物は鮮やかな色彩をもったイメージをわたしのうちに結ばせました」と成果をいいたてているのか。もちろん、「わたしが見て歩いた沖縄は、戦前のそれとは大きく違っているのですが、それでも想像によって昔の沖縄像を復原し、その風景の中に著者の姿を描き入れることができるようになりました」との自覚と、やはり実地踏査の成果をみせている。

「想像」による「復原」が可能なのであれば、その力をもっと逞しくすれば、現地に赴かずとも、それが可能になりはしないのだろうか。また現場に立たなければ「鮮やかな色彩をもったイメージ」を獲得できないのだとしたら、それはいわば著述のペンの弱さをあげつらうことにならないのだろうか。また、「読者に、ことがらを少しでもよりよく具体的にとらえていただきたかったから」写真を多く入れたというのであれば、なぜ初版にあつた8葉の写真すべてを削除してしまったのだろうか。よく理解できない説明、また弁明である。

**AO23Ki** 編者はまた素直にも、「この本を読むようにと気のすすまないわたしに強くすすめて下さった一人の姉妹に対する感謝を書きとどめたい」と記していた。編者の本書へ

の向きあい方がよくわからなくなる1文である。なぜ読む気がしなかったのか。つづけて、「率直に言って、初版本は読書意欲を沈滞させるような造本装幀でありました。同じ過ちを繰り返さぬため、わたしは今度の本の体裁にもかなり心を配りました」と、じつに率直な解説を展開している。読む気がしなかったのは造本装幀のゆえだったのか。喰わず嫌い、ということもひとにはあるが、造本装幀が悪く読む気がしないとは、なんともひどい難癖ではないか。さきに編者は「古典的な意味を獲得した本書は、もはや書きなおさるべきではない」と明言していたのだが、「造本装幀」は「古典」という評価の埒外にあるわけだ。なるほど、しばしば図書館というところは本のカバーは引き剥がしてしまう、そうした所為と編者の評価は通底しているのである。

くりかえせば、ふたつの版を手にしたものはだれでもすぐに、同じ『選ばれた島』でもこれらは違う本だとみてしまうだろう。そうした外見の違いは編者が意図して拵えたのだと、みずから明かしていたのである。

もとより、著者もふくめた初版の出版にかかわったものたちが、その造本装幀をめぐるなにを考え、どのようにしてそれができあがったのかはわからない。わたしには、海か波を想像させる初版のおもてに装われたデザインは少しもいやではなかった。むしろ、『選ばれた島』の内容にふさわしい緊張感と切迫感があるように感じた。かえって、復刊版の表紙に見えるひとになぞらえたなにもものか、あるいはひとを変造したなにもものかのほうが気持ち悪い<sup>17)</sup>。しかもその題が「病者への慰め」というのでは、病者を「慰め」なくてはならない、病者は「慰め」られるためにいるのだという指示にみえて、なお、違和感が増す（「ジャケット装画」は「渡辺禎雄作」とある。編者と同姓なので親族か？）。

こうしたデザインは単純に好きずき、好み、のあらわれであって、「過ち」というほどのことではない。体裁がいやだ、嫌いだといってもよいが、気に入らないそれをまるで違うものに仕立てあげてしまう改編、変改はひどく硬い力、いいかえれば強力にみえてしまう。表紙画や装幀もふくめて、『選ばれた島』は「古典」（「解題」）ではないのか。それを大き

---

<sup>17)</sup> このデザインの違いは、初版は「全体的に暗い雰囲気があることは間違いない」、復刊版は「意味深そうな絵になっていることは確かである」という感想を述べさせてもいた（後掲の末吉重人）。当然、わたしとは異なる感想がある。

くかえてしまう権限が編者にあるのか。

ここで述べておくと、この体裁にあらわれた編者の強力が本書の全体におよんでいる、とみるところが、わたしの論点となる。

**AO24Ki** もういちど、編者が示した、復刊版でくわえた変更箇所を確認しておこう——

(あ) 漢字を少なくした、(い) 難読固有名詞に読みがなをくわえた、(う) 実名表示、(え) 後注設定、(お) 「本の体裁」の変更、の5点となる。

だが、編者が復刊版でおこなった変更は、これら5点以外にもあり、しかも「ごくわずかりライトされただけ」にとどまらなかった。復刊版編者は、みずからがおこなった編集の中身を誠実に示さなかったのである。1972年版は、厳密には、編者がいう「復刊」ではなかった。ただ「刊行を中止または廃止していた出版物を再び刊行すること」(『広辞苑』第6版)を「復刊」というとき、「再び」というところに重点をおくのであれば、それでよいのかもしれない。だが「復」には、もどる、もどす、の意味もある(『新漢語林』)。もはや古典となったがしかし入手困難だという古書をふたたび刊行するにさいして、それは元のままではなかったのだ。再版とはいわず「復刊」とかかげた語義を、編者みずから裏切っているのである。

復刊版刊行後に、初版と復刊版とを対照した検討は、4名がおこなっている。まず、その時期はわからないが、①沖縄愛楽園自治会が所蔵する初版本への書き込みをしたもの、ついで、②2005年12月に発行された『沖縄国際大学総合学術研究紀要』第9巻第1号に掲載された「『愛楽園』創設者の青木恵哉著『選ばれた島』について—現在流通する復刊本と初版本との異同が意味するもの」の執筆者末吉重人、そして、2015年に「リプリント ハンセン病療養所シリーズ1」(近現代資料刊行会)として刊行予定の『選ばれた島』を監修した③石居人也と④阿部となる。監修者ふたりの前者による両版異同の検討が同書「解説」に収載され、後者による検討が本稿となる<sup>18)</sup>。

**AO25Ki** 2005年1月の青木恵哉銅像除幕式の記述から稿を起こした末吉は、『選ばれ

18) 紙幅のかぎられた「解説」では十分に展開できなかつた議論をここに補うとともに、ふたりの監修者それぞれによる『選ばれた島』の読み方の違いをあらわすことともなった。

た島』に非売品の初版本があることはあまり知られていない」という。この点は、1980 年代の終わりには高松宮ハンセン病資料館（現国立ハンセン病資料館）の展示で『選ばれた島』初版を知り、2003 年 1 月には当時の神奈川県立社会福祉協議会図書室で前掲『愛の村』をみていたわたしのうけとめ方とは異なる。わたしにとっての『選ばれた島』はまず初版があり、復刊版を知ったのは近年のこととなる。末吉はその初版を国立療養所沖縄愛楽園にいた金城幸子から借りたという。わたしたちに沖縄愛楽園自治会から提供をされた同書初版コピーの巻末には「金城幸子」の署名があり、わたしたちと末吉は同じものを手にして読んだのかもしれない（以下、金城本初版、とする）。

末吉はふたつの版をくらべて、「復刊本には、初版本から削除された部分、書き換えられた部分」があるといい、「この異同を考察していくと、青木師の置かれていた立場というものに新たな視点が当てられるように思える」と検討の見通しを述べていた。また、ふたつの版の異同については、「筆者〔末吉〕の知る限りではこれまで指摘されたことがないように思われる」ともみせていた。もっともこれは、復刊版編者をのぞく、といわなければならないのだが。それはともかくも、末吉は復刊版編者が充分には明示しなかった、削除と書き換えが復刊版にはあったとまず示したのだった。

なお、末吉は、復刊版編者について、その略歴をあげている。復刊版にまったくみえないそれによると、復刊版編者の渡辺信夫は、みずからが設立した東京告白教会の牧師で、その名はヒトラーに抵抗した牧師たちによる告白教会の名称を継いでいるという。

末吉は、ふたつの版の異同を 4 点指摘した——「1）登場人物が病名〔療養所内での仮の名のこと〕から実名に変更されたこと。／2）青木師が密かに思いを寄せていた人物の実名を明らかにしたこと。／3）初版本にあった文章が復刊本では削除されている部分があること。／4）初版本の内容を書き換えた点があること」であり、「とにかく復刊本は僅かながら書き直された」と指摘した。第 1 と第 2 の実名表示は、復刊版編者もみずから示していることはすでにみた。

**AO26Ki** 第 1 点について末吉は、「らい予防法」が廃止となる 1996 年より四半世紀ちかくもまえのこととなる「1972 年時点での実名の公表はハンセン病患者らにとって負担ではな

かっただろうか」との危惧を示している。その根拠は、1999年に刊行された『ハンセン病回復者手記』（沖縄県ハンセン病予防協会）でも実名が使われていないところにあるとみせた。「資料としての価値」と公開の時期のどちらを優先するかが論点となる。ひとことだけわたしの見解を示すと、実名表示にどれだけの「価値」があるか、わたしには疑義がある。

第2点についての末吉の見解は明瞭ではなく、「非常に微妙な問題」があると指摘しているようにもみえる。

第3点について末吉は4箇所の削除をあげ、それらを「大師信仰」と「聖餐の問題、カトリックとプロテスタントの教理上の問題」とまとめた。末吉があげた削除箇所その1は初版3ページの3行、その2は同じく4ページの11行、その3も同じく5ページから6ページにかけての24行、その4は33ページの9行である。合計47行にもおよぶ削除である。

ところで、わたしたちの手許にある金城本初版コピーには、復刊版で削除されてしまうこれら4箇所を囲む線が書き込まれている。まさか金城から同本を借用した末吉が書き込みをしたとはおもえない（彼からの教示を得ただれかが書き込んだのかもしれないが）。さきに示したとおり、この囲み線を書き入れたものを両版の異同を検討したひとりにあげたゆえんである。

末吉の説くところにもどると、「大師信仰」についての記述を削除した理由を、「キリスト教で言うところの異教的雰囲気になりすぎたものであったためかもしれない」「体系的な神学的教育を受ける機会がなかった青木師のキリスト教教義に対する理解には断片的なものがあつたことは想像に難くない。その点を渡辺師は訂正したくて削除したのかもしれない」と、本稿でもさきにみた復刊版「解題」での編者の主張をふまえて、末吉はその理由を推しはかっている。

もうひとつの「カトリックとプロテスタントの問題」については、青木が「自分なりの考えを述べている」ために、いいかえれば、さきにみた教義理解の「断片」性によって復刊版編者によって削除されたと推察しているようにみえる。

これら4箇所の削除は、いずれも宗教の信仰や教理にかかわる記述に対してくわえられ



たのである。さきにみたとおり、復刊版編者は、『選ばれた島』初版を読み、沖縄における「死霊崇拜」と著者のキリスト教信仰とのあいだにある「矛盾」をみたものの、しかしそれについて「大幅の改稿」をしなかったとうけとれる記述をしていたはずなのだが、断りなく、宗教にかかわる初版の記述を削除していたのだった。しかもそれは47行もの分量だった。これは両版の異同を確認しようとして初めてわかるのであって、編者による復刊版を読んだだけでは、どうにもわかりようがない改編、変改なのである。当然のこと、削除された箇所はもはや、そこにはないのだから。

**AO27Ki** 第4点の書き換えは、「「共産黨員」を「共産主義者」に」、「「特殊民」を「未解放部落」に」の2箇所だという。後者は正確には「特殊民」と「特殊部落」が「未解放部落」に書き換えられ、さらに末吉が指摘していない箇所をあげると、初版の「特殊民」が復刊版では「差別された部落の人たち」と書き換えられたところもあった。ここでも金城本初版にふれると、「共産黨員」「特殊民」「特殊」の文字はやはり、書き込まれた線で囲まれていた（「差別された部落の人たち」と書き換えられた「特殊民」に囲み線はない）。

書き換えの1点めについては、末吉が引用したとおり、復刊版編者は後注49で当時の沖縄に「共産黨員が存在し、活動をしていた事実を確認できないので」とその理由を明らかにしていたが、末吉は共産黨員がいたこと、療養所建設反対運動に共産黨員が関与したことを縷々論述した。2点めについては、「「特殊民」という表現が差別用語となっていることへの配慮であろう」と書き換えの理由を付度している。

ただし、「共産党」の語が復刊版に1つ残っている（復205）。文脈からしてこれはよいか？。よくわからない。

**AO28Ki** 書き換えと削除について最後に末吉は、「青木師の断片的な神学的知識を補うためのものと思われる部分もあるし、また渡辺師の神学的信念に合わないために削除されたものもあるように思える」とまとめ、末吉の考える「歴史史料」をめぐる引用の手続きや、復刊版編者が後注をつけたことをふまえて、「原文をいじることは適切ではなかったように思う」と総括した。末吉は、ドイツ告白教会を継ごうとする復刊版編者の「信念」をおもえば、復刊版にくわえられた編集を「理解できないでもない」とみせながらも、やは

り、「告白教会の信仰と青木師の著書は別物と考えなければならない。たとえ神学的には断片的な知識であったとしても、それが返<sup>マ</sup>って青木師の人となり<sup>マ</sup>を伝える材料となったと思えるからである」と、復刊版編者がおこなった削除と書き換えを容認しない姿勢をみせた。

末吉は、さきにみたとおり、ふたつの版の異同、とりわけ復刊版にくわえられた削除と書き換えを考察することで、青木がおかれていた「立場」について「新たな視点が当てられる」と見越していた。それはなにか——「青木師のキリスト教信仰はファンダメンタルなものではなく、明治・大正期に多い日本の伝統的宗教とキリスト教を織り交ぜたようなタイプのもの」ということなのだろう。

末吉の稿は、こうした青木像の提示に終わらず、復刊版編者の所為をも見抜こうとする。「渡辺師は、社会事業史におけるキリスト教慈善の「負の部分」を再現させたことになるのではないか」との指摘がそれである。ここにいう「負の部分」とは、「キリスト教慈善事業史に登場する事態」で、「相手の救済を中心に置くのではなく、自らの救済のために自分の信念を相手に投影すること」だと説き、末吉の指摘は、編者がほどこした編集への辛辣な批評となった。

**AO29Ki** もうひとつ、「共産黨員」という文言の書き換えをとりあげ、「その後の研究」もふまえたうえで、それは「まったく蛇足」だったといわば切って捨てたのだった。末吉はいう、「そういう点において、青木師はハンセン病者として虐げられたのもさることながら、『選ばれた島』の72年復刊本においても二重の意味において貶められたと考えるしかない」と、編者による青木への抑圧を観取したのだった。

ただこの「二重の意味」がわかりづらい。その直前には、「青木師は正式な学問的訓練を受けていなかったかもしれないが、その点を曲解させるような書き換えとなったと言わざるを得ない」と記されているので、いわば歴史の事実についての無知ゆえに、編者がいうところの実際においては共産黨員がいなかったにもかかわらずそのように記載したことで、青木の歴史知識の欠如が露わになってしまったのだとうけとられかねず、無知と罹病との「二重の意味」での抑圧ということか<sup>19)</sup>。末吉が稿の冒頭でかかげた、青木がおかれた「立

<sup>19)</sup> こうしたわたしの読みとりがなりたつならば、末吉がさきに示した「青木師の断片的な

場」も、「二重の意味」での抑圧をこうむったことを指しているのかもしれない。

末吉は、復刊版編者が暗示しながらも明瞭には開陳しなかった編集の内実を看破したうえで、そこに籠る、「過度な編集」という編者の権力と、原著という編集の客体におよぶ強力を考える視点を提示したといえる。このようにまとめてみると、わたしは末吉のこの検討結果に同意する。ただし、「復刊本は僅かながら書き直された」ていどなのかどうか（傍点は引用者による。以下同）。そうではない。

**AO30Ki** ここで改めて問おう。1972年発行の復刊版には初版とは異なるなにが編者によってくわえられたのか。復刊版編者がおこなった編集は、末吉が指摘した箇所にとどまらなかった。

まず、編者自身が示したところにあわせてみると、さきの(あ)漢字削減については、そのとおりで、たとえば、「私」→「わたし」、「貴方」→「あなた」、「癩」→「ライ」などが多くみられる。ただし、こうした方針が貫徹しているわけではなく、いくつもの漏れがある（初版もまた表記の統一が不十分だった）。また、なぜか断りがないままに、平がなを漢字にする例も、たとえば、「とき」→「時」などにみられる。すると、初版の「……とき私は」は復刊版で「……時わたしは」となるのである——こうした書き換えにどれほどの、どういった意味があったか。

つぎの(い)読みがなの追記は、ルビ（振りがな）ではなく、「霹靂（へきれき）」（復21）といったぐあいで、沖縄の地名が列挙される箇所ではたとえば、「具志堅（ぐしけん）、今泊（いまだまり）、兼次（かねし）、炬港（ていみなと）、屋我地（やがじ）、渡久地（とぐち）、伊江島（いえしま）、大宜味（おおぎみ）、鏡地（かがんじ）、辺野喜（べのき）などを順ぐりに伝道してまわったのである」（復95）となって、とても読みづらい。なぜルビにできなかったのか。たとえば、初版になかったルビが「蒲公英」（復58）のとおりにつけくわえられている箇所も復刊版にはあるのだから、ルビをふれない事情があったはずはない。

---

神学的知識」というとらえ方や評価もまた青木の貶視となるはずだ。青木の信仰をめぐってそこに「神学的には断片的な知識」をみたとして、では「断片的」とはだれのどういった観点からの見方なのか、それをどう議論するのが明瞭でなければ、これはただの冷評や軽視になってしまう。青木の「神学的知識」はその全体を網羅していなければならなかったのだろうか。

(う) は後注を打って実名を表示しているところもあれば、まったく断りなく初版の原文をかえている箇所もあり、統一性がない。

(え) の後注は、せっかくつけられたのに、その内容が誤っているところがいくつもあつた。わたしの眼についた誤記をあげると、注 5 に記された三宅官之治の生年は「一八七九年」ではなく 1877 年、「大島療養所開設とともにここに転じた」とあるは、開設時の名称（第四区療養所）と「ともに」ではなくその翌年だったので 2 箇所の誤りがあり、彼の「伝記」という書籍は「癩園創世」ではなく「癩院創世」が正しい書名（またかならずしも三宅の伝記ではない）。つぎの注 6 では、ここでも長田穂波の生年を誤って、1891 年なのに「一八九〇年」とし、また「一九一四年処女詩集「靈魂は羽ばたく」を公にし」とある著書の刊行年は 1928 年が正しい<sup>20)</sup>。おそらく昭和 3 年を大正 3 年と誤ったうえで西暦にかえたのだらう（傍点部の形容はもう死語にしてはどうだろうか）。

復刊版につけられた後注は、その記載内容の検討が必要である（わたしたちが監修したリプリント版ではそれをおこなえなかった）<sup>21)</sup>。

(お) についてはすでにみたとおりで、ここにくりかえさない。

**AO3IKi** 両版をつきあわせれば、復刊本文には、さきの(あ)(い)(う)とは異なる書き換えがあるとすぐにわかる。たとえば、ナカグロ(・)が読点(、)にかえられ、漢字の送り仮名がかえられ、明らかな誤記が正しくなおされている（「靈友会」→「靈交会」など）。

編者がいうところの「リライト」は、実名表示に「伴い文章を書き直す必要の生じたところはなおした」というていどのはずなのだが、根拠のよくわからない書き換えや削除が散見される。たとえば、「しかしながら」→「それでも」（復 23）、「数本の鬱蒼たる老樟の

---

<sup>20)</sup> 編者は自著の前掲『ライ園留学記』で大島を訪ね靈交会信徒に会ったと記している。同書でも「癩園創世」と誤記し、また「長田さんはここではほとんど感化を残していない」と記した。復刊版後注にいう「三宅官之治とともに〔長田が〕園内の信仰的指導者となった」の記述と矛盾しないか。ただ長田については「ふつう「ながた・ほなみ」と呼ばれるが姓は正しくは「おさだ」という指摘は重要である（典拠は明示されないが）。穂波の姓については前掲『島で』の「IV 療養者を探査する一長田穂波」を参照。

<sup>21)</sup> なお、誤りという点では復刊版につけられた『「選ばれた島」関係年表』でも「著者関係」の欄で「徳島県に誕生」のその年が誤っている（正しくは 1893 年）。

枝が」→「数本の鬱蒼（うつそう）たる樟の枝が」（復 45）、「彼等の熱に動かされて、回春病院を選ぶことにした」→「彼らの熱意に動かされて、回春病院を選ぶことにした」（復 46）、  
 「私の氏名は偽名の江本安一とし」→「わたしの氏名の江本安一とし」（復 37）といったぐあいで、最後の例では、削除=書き直しによって、療養所における療養者の名をめぐる事情がわからなくなってしまう恐れがある。

推しはかれば、正確なことがらを記す、読みやすくするなどの意図からの修正となるのかもしれないが、ではつぎの例はどうか――

- 「車座になって故人の冥福を祈った」→「車座になって故人を追悼した」（復 109）、
- 「私は部落から芋や豆腐を買ってきて彼と共に昼食とも夕食ともつかぬ食事をし」  
 →「わたしは部落から芋や豆腐を買ってきて彼とともに昼食ともつかぬ食事をし」（復 141）、
- 「自転車を指さされた瞬間私はびくっとし」  
 →「自転車を指さされた瞬間わたしはびっくりし」（復 159）、
- 「「イエス様は人間の罪を贖われたが、その点私たちと似たところがありますね」と一人  
 がいった。／なるほどそういえばよく似ている」  
 →「「イエス様は人間の罪を贖われたが、その点わたしたちと似たところがありますね」と一人  
 一人がいった。／なるほどそう言えば似ている」（復 163）、
- 「出席者は常に四・五十人を下らず、同じ苦しみと悩みを持つ者」  
 →「出席者は常に四、五十人を下らず、同じ苦しみを持つ者」（復 178）、
- 「部落の有志の一人が」→「部落の一人が」（復 188）、
- 「一五〇〇坪では私の構想の半分にしか過ぎない。しかしよく考えてみると今もっとも  
 肝心なことは、まず自分の土地を一坪でも二坪でも持つということ」  
 →「一五〇〇坪では構想の半分にしか過ぎない。しかし、よく考えてみると今最も肝心な  
 ことは、まず自分の土地を一坪でも持つということ」（同前）、
- 「この六〇〇坪とあの一五〇〇坪との交換」→「この六〇〇坪との交換」（復 189）、
- 「私の貯金は食糧・小屋・その他の費用に使った」  
 →「金は食糧、小屋、その他の費用に使った」（復 227）、

- 「理由を説明して解散意見を述べた。誰も反対しなかった。そこで私は明朝」  
→ 「理由を説明して解散意見を述べた。そこでわたしは明朝」(同前)、
- 「癩に対する無理解と病友たちの受けてきた迫害を綴って世に問うたところ」  
→ 「ライに対する無理解と、病友たちの受けてきた迫害とを書き綴って世に問うたところ」  
(復 229)、
- 「そして決心の臍を固めていった」 → 「そして決心のほどを固めて言った」(復 237)、
- 「多くの病友に接して私には十分にその自信があった」  
→ 「多くの病友に接してわたしにはその自信が十分にあった」(復 278)、  
——なかには信仰心ゆえの変更をおもわれるところもある。それにしても、これらは絶対に必要な修正なのか、軽微な「リライト」なのか。わたしはそうはおもわない。事実を照らしたというのであれば、その根拠を注記しなければ、編者みずからが設けた指針に反する。

編者は確信をもって、『選ばれた島』初版を改編、変改したといわなければならない。しかも自分の好みにそって、と。

**AO32Ki** たとえばほかにも、信仰心からとおもわれる追記や削除があり(聖句の出典表示\_復 64、聖歌番号の削除\_復 106)、それらにはすでにみたとおり、末吉ならば少しは理解を示したかもしれない。そうは感じないわたしは、やはり、編者の所為は、荒々しく粗雑だという点で乱暴なおこない、であり、その意味でこれは暴挙というべきだと考える。

つぎのとおり事例もある——初版の「沖縄独特の蛇皮線」という記述を編者は、「沖縄独特の三味線」(復 98)と書き換えた(もっとも近年は「三線」というが)。現地に固有なようすの一般化である。こうした例はまた、初版の「はっきりした日本語でいって私を見つめた」という記述を「はっきりした標準語でいって、わたしを見つめた」と書き換えたところにもつうじる(復 76)。これはその少しまえにある「琉球語」の文言に対応している。もっとも、復刊版でもこの少しあとに「日本語」とあり、初版の表記が残っている。それはおそらく校正ミスなのだろうし、他方で初版にも「標準語と土地の言葉」「沖縄語」などといった記述もある(91、104、105 ページ)。復刊版での書き換えは一貫していない、徹

底していないという嫌いが全般にみられるのだが、それでもここにとりあげた書き換えは、本稿冒頭で述べた、復刊版「解題」にみられる編者の意思とかかわって、復刊版を貫通する編者の編集規範というべきものとする。それを平準化と呼ぼう。

これはたとえば、さきにみた難読漢字（編者がいう固有名詞にかぎられてはいなかったが）に振りがなをつけたり（「霹靂（へきれき）」、「自棄を起こし」を「やけを起こし」とかえたり、またかならずしも難読ではないが、「従って幼いうちから」を「したがって幼いうちから」と漢字を減らしたりする変更もふくんで、わたしは平準化と呼んでいる。そして、編者がおそらくはこれが一般だろうと見込んだところで漢字の送りがなを正したこともこの平準化のひとつと考える。編者は、復刊版が刊行された1970年代初頭の時代に、決して特異ではなく、ふつうだとおもわれるところへと初版の文字と文章を均し、正していったのである。

**AO33Ki** 誤記の修正もあわせてみると、これは、編集という作業においてみればなにも特段におかしいということではない。一般に出版社の編集者がおこなっている、とてもありふれた編集作業にすぎない。信仰心から発せられたと推しはかれる追記、削除、書き換えは、初版執筆者に断らずにしたところが問題となり得るのであって、しかしそれも当事者の逝去ゆえにかなわぬ仕儀となったのだから、致し方のないちょっとした不備やせいぜいのところちょっとした瑕疵だとしてあまり問題視しない向きもあるにちがいない。現に復刊版編者はそれをおこなったのだし、同版がキリスト教関係図書を発行する老舗といつてよい出版社から刊行されたのである。

ただし、この平準化は、日本／沖縄という非対称を前提に遂行されている。なにより初版そのものに、この非対称が埋め込まれていたのだ。『選ばれた島』という著述には、沖縄の療養者の生をめぐる環境を改善していった、それが改善されていった、という筋立てがひとつ、もともとあったのである。『選ばれた島』はひとつに、病者の生活改善の説話だったのだ。生活の場を、その環境を、ふつうに均す平準化の物語が、療養所開設をめぐる奮闘するひとりの療養者の実践を軸に展開したのである。復刊版編者はこの平準化を、「古典」として尊重するがゆえに「大幅の改稿」をすることなく、「ごくわずかりライトされた

だけ」と自供できる「程度」に、初版著者の文字と文章とにくわえたとみせたのだった。

この平準化の極致が、『選ばれた島』復刊版のそのなかからの、そのページのうえからの、初版著者の抹消となる。勢い込んで書いたこのわたしの熱を少し冷ませば、初版著者は消されようとして、消えかかったのだ、といおう。じつに、復刊版の文章では大量の「私」が削除されていたのである。

**AO34Ki** 復刊版からは、初版にあった「私は」「私が」「私の」「私に」「私を」の語が大量に削除された。この削除は「私達」にもおよんで、初版著者（たち）がそこにいること、あそこにあることが抹消され、また、なにかをした著者が、なにかをなされた著者が抹消されたこととなる。復刊版ではこうした削除が勢いあまったのか、「彼は」「彼の」「彼らの」といった語にもおよんでいた。

この点についてはすでに、さきにみた稿で末吉が一瞥をあたえていた。その稿の「5 初版本と復刊本の異同」の末尾に、「その他に、58年初版本では「私」という主語が多く使用されているが、72年復刊本では省略されているのが目に付く」と2行で記していた。両版を走り読みすれば、すでに漢字の削減のところ指摘したとおり、「私」の「わたし」への書き換えはかんたんにわかる。さらにいくらかていねいに両版をつきあわせなければ、この「省略」はわからないだろう。末吉はさきにみたわずか2行での言及のみにとどまっていた。「省略」といいあらわしたとおり、末吉は「私」の語をなくてもよいていどにみて問題視していないし、これまでみてきたとおり、復刊版編者は、この点を明示していなかったのだから、「私」の語の削除を一顧だにしていなかったのだった。

ところで、日本語論は日本文化論の中核を占めるといってよい様相がある。あるいは、日本語を論じてこそ日本文化論を極めたこととなるという論者の得意満面の論述ぶりがかがえるといってもよい。

そうした日本語論が、「日本語は諸外国語と違って、「何が」の主語や、「何を」の目的語の略された形が頻出する」と認めているのだから、さきにみたとおり「私」という主語が〔中略〕省略されているのが目に付く」とだけ指摘して議論をすませても、どのような不思議もないということとなる。それで「立派に日本語として通用するし、日本人なら誰一



人正しい日本語として疑わない」とのお墨つきがあるからである<sup>22)</sup>。こうした日本語論からすれば、「私が」の主語を多用する文章は、まちがった日本語の恐れがあることとなる。

もっと明快に「日本語に主語はいらない」と説く論者もいる<sup>23)</sup>。この主張は復刊版編者の所為を支え、それに正当性をあたえるだろう。でも、「いない」けれどもあってもよい、とはならないのだろうか？。

てぢかにあった（中公新書と講談社選書メチエ）という理由で参照した、一般にうけいれられやすいであろう日本語論（どちらも一般性を担うシリーズの1冊だ）からすれば、復刊版編者が「私」などの語にくわえた処理は妥当であり、『選ばれた島』復刊版は識者の適切な修正によってようやくごくふつ—の和書になったと評価されるかもしれない。歪んだ文章を矯める編集のお蔭ということか。

**AO35Ki** ではここで、『選ばれた島』にその「一部を転載」されたテキストをみよう（復252-257）。それは、「長島愛生園医務課長林文雄博士」が「日本 MTL 長島支部から発行されたパンフレット（NO2）「救を待つ沖縄の癩者」に、「この暴逆を座視せんや」と題して

<sup>22)</sup> 森田良行『日本人の発想、日本語の表現—「私」の立場がことばを決める』（中央公論社、1998年）。森田は日本語と「英語など多くの外国語」とを比較して、後者をそれを発する「己を客体化し対象化し」「客観的視点」をとる言語だととらえる。これとの対照で日本語は「単に文法的に主語省略の可能な言葉だからという理由よりは、むしろ、自身の視点から対象把握がなされているために、己はあくまで表現者の立場で、わざわざ自身を客体化して文中の主語に立てるといった姿勢が取りにくい」と説明する。とても単純な二分法に支配された議論が展開する。では、赤ちゃんが、みじゅ（水）、というばあいも「あくまで表現者の立場」を選択したからなのだろうか？。買い物時にクレジット決済にして、何回払いになりますか？との問いに、1回で、と応じた客もあくまで表現者であろうとしたからそうぶっきらぼうに話したのか？。日本語論は愉快だ。

<sup>23)</sup> 金谷武洋『日本語に主語はいらない—百年の誤謬を正す』（講談社、2002年）。なお同書もそれに先行する沼野充義『屋根の上のバイリンガル』（白水社、1996年）もどちらも参照した『パパ・ユーア クレイジー』（W. サローヤン著、伊丹十三訳、新潮文庫版、1988年）は訳者が自己に課した「原文の人称代名詞を可能な限り省略しない」との「ルール」のもとに訳されている（伊丹十三「あとがき」）。本稿で議論の対象とした復刊版編者とまるで逆の試みである。前者はこれを「その結果は言うまでもなく惨憺たるもので、日本語と呼べる代物ではない」「失敗」だとかたづけ、後者は「注目に値する試み」ととらえたいうえでさらに蓮実重彦『反=日本語論』（筑摩書房、1977年）をふまえて伊丹の訳文にあらわれた「違和感に徹底的に身をゆだねることによって、言語の背景にある「制度」なるものを批判する契機」を活用するよう促している。参考文献に田中克彦の著書をあげながら（しかも『国家語をこえて』ちくま学芸文庫、1993年）「母国語」と平気で記すこの前者著者の言をわたしは信用しづらい。では「外国語」という表現はどうするのかと問われたら、言語学者でないわたしは困ってしまうが。なおここで参照した文献には複数の版がある。

執筆」した稿である。復刊版は後注 64 で、「北大医学部卒業ののち外科の副手をつとめ、一年後全生病院に勤務、愛生園医務課長、敬愛園初代園長、青松園医官を歴任」と林を紹介した（全生病院、愛生園、敬愛園、青松園はいずれも癩そしてハンセン病をめぐる療養所）。林の稿は、『選ばれた島』の「この暴逆にも」と題された章にその一部が転載され、「屋部の焼討」をめぐる記録として活用されている。

復刊版で 6 ページにわたる林の稿は、初版とくらべてみると、ほとんど編者が手をくわえていないことがわかる。初版の記号「」が『』となり、ナカグロが読点にかわり、聖句の出典が削除され、送りがなが正され、ふた桁の数字を示す漢数字表記から「十」が削られるという、復刊版全編にみられる平準化が数か所みられはするものの（そして実名表示として「K 丸」「K 島」といったイニシャル表記がなおされた）、「癩」も「ライ」にかえられずそのまま、「如何」「嘗て」も平がなとならず、初版の数多くの表記法がそのままとなっているのである。なにより、林のテキストからは、ひとつの「私」「余」「われわれ」も削除されていなかった。「私」を「わたし」と平がなに開くこともなかった。日本生まれ（ただし札幌なので本土ではなかったが）で、大学を卒業して学位を授与され医師となった林の日本語に、復刊版編者による平準化の力はおよばなかったのだ。

復刊版編者の編集方針は、初版の著者による語と文章はかえるが、そこに転載された初版著者によらない文章はかえないということなのだ。林の文章を転載する直前に、復刊版編者はわざわざ、「その一部を転載する。(原文のまま)」と記した。意図した「原文のまま」だったのだ。

**AO36Ki** ここで、復刊版編者が削除した「わたし」にかかわる部分を復元するとどうなるかを、いくつかの例でみておこう。編者が削除した部分を太ゴシックであらわした。

感激の涙が**私の**頬をぬらした。**私の**人生観は百八十度転換し、病苦は喜びに変じ、卑屈は影をひそめて満足がつねに**私の**心を満たすようになった。〔復 35〕

その男は高飛車に**私に**いった。**私は**、その目付で、彼が刑事だということがすぐ分かった。〔復 157〕

便利なので**私を**訪ねてくる病友が急に増えた。それで**私は**定期の礼拝の外に二か月に一

回修養会も催した。〔復 178〕

——さて、**これらは**、その語がそこにあってはならないほどにくどい文章だろうか。

また参照としてここに、復刊版編者自身が記した文章から、「わたし」にかかわる部分を削除するとどうなるかをみるとしよう。該当部分に抹消線を引いた。

この本をはじめて読んだとき、~~わたしは~~当然、非常に深い感銘を受けたのですが、精神的なものだけしか読みとってはず、いわば色彩のない絵、ないしは抽象画のようなものとしてこの書物をみていました。これではこの本の復刊を推進する力が十分には湧いてきませんので、~~わたしは~~この本に書かれていることが皆、~~わたしの~~心の中で、いききとしたイメージにならなければならないと思いました。そこで~~わたしは~~、著者が歩いた道を~~わたし自身も~~実際に歩いてみようとなりました。(復 297)

——なぜ、復刊版編者は自分で記した文章に、これほどまでに「わたし」の語をおいたのだろうかと~~わたしは~~考える。編者もまたさきにみた林と同じく大卒（しかも本土の大学）であり、牧師であり、大学講師なのだった。復刊版編者は、初版においてもすでにその原稿段階で「リライト」があり、しかもそれをおこなったものは「愛楽園入園者中最高の学歴を有する知識人」だったと、その正当性を示していた。ならば、京都大学卒業の自分にも書き直しの能力と権限があるとの口吻がうかがえる。~~わたしは~~、初版にあった「私」の削除は必要でも必然でもなく、明らかに復刊版編者の意図したところだったのだ、と述べたい。

**AO37Ki** 文法上、あるいは英語などの「外国語」と比較したうえで、また日本文化をふまえて、日本語の「私」や「主語」をどのように<sup>いじ</sup>弄くろうとも、現にいくにんもの人びとが話し言葉であれ書き言葉であれ、そこに「私」を入れていることを、さきにみた日本語論者たちは忘れていてのではないか。そして、文法も外国語も意識しないで多くの日本語使用者は主語なしで話したり書いたりしている。省略可能であろうと、もともとなかったのであろうとも、少なくともわたしは、わたしの書く文章に明確に意識して「私」を入れている。『選ばれた島』初版の著者が、「私」の語にどういう思いを籠めていたのか、もっと正確にいえば、「私」の語を自分の文章に書くときにどういう思いを籠めたのか、なにを

感じながらそれを書いたのかは、わからない。そうであってもとにかくもいずれ一書にまとまることとなる文章を綴るなかで、彼（ら）はひと文字ずつ原稿用紙に「私」とペンで書いたのである。平準化の意思をもつものからして、多いとみえるほどなのであればなおのこと、初版著者（たち）は「私」といちいち書いたのだ。

その語の削除は、平準化する力をもつものが特殊と認めた異態にくわえた抹消、消去を意味する。そうした意図を復刊版編者が自覚していたかどうかはここでは問わないし、問題にはならない。ただ、彼は削除という編集行為に躊躇がなかったことは明らかである。しかも自分で設けた基準を犯しても初版の文字を削除する確信があったとみえる。

**AO38Ki**　すでにみたとおり、復刊版編者は、神観念や神信心などの信仰にかかわる初版の文章を断りなく削除していた。くりかえせばそれは、復刊版編者自身が、初版著者が存命であれば「少なくとも著者とよく話し合った」と指摘した2点のうちの1点だった。

もう1点の「皇室の御仁慈」についてもみておこう。沖縄県が本部半島の嵐山に保養院を設置しようとしたところ、地元民による反対運動が勃発した。その呼称である「嵐山事件」の名称を題した章で、そうした騒動を「ひとり沖縄ばかりはこんな憤慨にたえない状態」だと慨嘆し、それとの対比で、沖縄以外では「ライに対する一般社会人の関心と理解もまたとみに高まった」と評価する箇所、くだんの貞明皇太后の「御歌」が引用されているのである（復206）。

すでにみたとおり、復刊版編者は、こうした仁慈を仰ぐことと、療養者みずからが自己の権利獲得として療養所開設を実現するために運動を展開したこととのあいだに「矛盾」をみて、ただし、「大幅の改稿」をしないと読める記述をしていた。

それがこの章の「御歌」を引用し、「救ライ事業は着々実績があがっていた」と述べるあたりで、

特に\*皇太后陛下におかせられては、昭和五年（一九三〇）年、各療養所の患者に御内帑金（ごないどきん）と御紋菓を賜わり、また昭和七年（一九三二年）には、

つれづれの友となりても慰めよ／行くこと難き我にかはりて

というありがたい\*御歌をお読み遊ばされたので、ライに対する一般社会人の関心と理

解もまたとみに高まった。[\*は文字が削除された箇所をあらわす]

——という文章において順に、「畏くも」と「極みの」という文言を、これまた断りなく削除していたのである。「皇室の御仁慈」を容認しない、もしくはそれを否定するであろう復刊版编者からすれば、『選ばれた島』に記されている、青木が少なくとも「御歌」にみせる仰望や崇敬は認めたくない、認められない、あるいは許しがたいところだったのである。だからこの点について、できることならば初版著者と議論をしたかったと述べていたのだが、それがかなわないところで、不快な、許容できない、否定すべき箇所から、最小限の文字数を削除したのである。復刊版编者にとっては、『選ばれた島』を「古典」として保存するためのぎりぎりの処置だったのである。

**AO39Ki** さきにみた林文雄の稿「この暴逆を座視せんや」にも、「癩救済」を述べるなかに、「光明皇后が癩者を浴せしめ給うた時癩者は忽ち光を放ち仏となったというが深い言葉である」との1文がある。復刊版编者はここに少しの手もくわえていないのだった（まあ削除するにしても「給う」「深い」くらいだが）。

「畏くも」「極みの」というわずか6字の削除が「大幅の改稿」かどうか要検討とする穏健な見解もあるかもしれない。わたしはこの削除に、「事実でない事を事実のようにこしらえること」（『広辞苑』第6版）という意味での「捏造」と反対の所業をみる。事実であったことを事実でないように消した悪行は、これもまた捏造とってよいか、あるいは、隠蔽、掩蔽、隠匿というべきか（『広辞苑』第6版には「隠蔽」の用例として「証拠事実を一する」とある）。「大幅」の語を数量や規模をあらわすとするならば、6字の削除は小さく少ない改稿かもしれないが、テキストの改竄という点では甚大な改稿だとわたしは判断する。

もとよりわたしは、イエスの教えより皇室の仁慈を上位において仰げというつもりはなく、また皇室を崇敬せよといっているのでもない。改竄も捏造もいけないといっているにすぎない。聖徳太子を尊敬する現代人が、十七条憲法には重大な欠陥がある、それは民主主義の観点がないことだ、だからそこに国民主権を書き込めばよいと考え、その条文に「主権は国民にある」とくわえた史料集を刊行したら、それは笑ってすませられるのだろうか。

**AO40Ki** 石居人也とわたしは、2013年5月28日に沖縄愛楽園自治会で開かれた「青木

恵哉資料 編集委員会」に出席した。この会議の趣旨は、「沖縄愛楽園社会交流会館（歴史資料館）が来年度〔2014年度〕に開館することを記念し、青木恵哉の功績を人々に広く知らせるために、直筆原稿などを整理して発刊すること」（同会議の「事前メモ」による）に向けてなにを、どのようにするかを協議するところにあった。

2014年5月9日に東京で開かれたミーティングで、沖縄愛楽園社会交流会館開館にあわせて『選ばれた島』初版と復刊版のリプリント版を制作することがおおよそ決まり、その後、すでに仮オープンをすませた同館の本格開館が予定されている2015年3月26日に向けて、「リプリント ハンセン病療養所シリーズ1」としてその刊行が準備されている。

さきの編集委員会では、ふたつある版のどちらをリプリントするかが議題の1点となった。そのとき、市民サークルの読書会で『選ばれた島』を輪読しているという出席者から復刊版のほうが読みやすいといった発言があったと覚えている。平準化された文章となった復刊版は、初版にくらべると読みやすくなったのかもしれない。だが『選ばれた島』を詳細に検証しようとする研究者までもが、それを読みやすいと評価しては、復刊版が初版にくわえた平準化という強力にみずからもが順化していて、それに無自覚だったと告白したことになってしまう。この平準化の強力は、「僅かながら書き直された」とかたづけられていていどではなかった。

**AO4IKi** 本文リライトのていどをべつとしても、初版と復刊版ではそのまえの巻頭ページが大きくかえられている。ハンナ・リデルの肖像写真や、なにより彼女への献辞を削除してしまったようすは、まるで宗派对立が顕在化したかのようであり、また穿ってみれば、初版にあった青木の肖像写真の削除は、なおいっそう『選ばれた島』を聖別化し、聖典として崇めるための所為と映る。聖書にも神の画像は描かれていないのだから。

青木を「先生」（前掲『沖縄ライ園留学記』など）と記す復刊版編者は、彼を尊崇するとともに、その著書という『選ばれた島』を古典・聖典化し、そうした書にふさわしいように中身も外見もつくりかえたのだといわなくてはならない。くりかえしわたしが指摘した文章の平準化も、異形ではないそれこそが聖典にみあう文体なのだとなる。

さきに想定した研究者による安易な感想への戒めと同様に、信仰や善意や使命につきう

ごかされて療養所を訪ね、そこに生きる療養者たちに詩歌、俳句、短歌、総じて文芸を「指導」<sup>24)</sup>するものたちの所為にも注意を払う必要がある。たとえば、内田守人や大城立裕がなにをしてきたかということである。

信仰をめぐる対立——たとえば偶像を認めるかどうかの違いが、相手をまるごと容認しないようすはみえやすいが、同じ神への信心をあらわす信徒のあいだで、讃えるがゆえにその同志をいっそう崇められるものへとつくりかえるなかに潜り込む強力は、なかなかつかみづらいかもしれない。仰ぎみる同志の遺したものを、よりいっそう理想化しようとするとき、その力がどれだけ深く遺品を傷つけようとも、それは聖別化の被膜におおわれて隠され、許され、その暴戾なふるまいがわからなくなってしまうのである。

復刊版編者が自分で執筆した「解題」には、沖縄における本土との違いを強調し、それを均すという編集をめぐる編者の意思があらわれていた。細かな漏れがあるにせよ、その編集の方針や意思は、『選ばれた島』復刊版の全編に貫徹していたのである。本土日本から沖縄を特殊視する観点から発せられた平準化という強力は、沖縄で綴られたテキストの歪みを、あるべき信仰と誤っていない表記法 (literacy) へと正してゆく圧迫となったのである。

それをあらわしたという人物の肖像も、「私」という人称も削られた『選ばれた島』復刊版は、その意味で傷つけられたテキストなのだった。

(2015年3月19日印刷)

附記 本稿の印刷は、たまたま、国立療養所大島青松園に生きたひとりの女性の三十日祭がおこなわれる日となった。2月初めに誕生日を迎えてから十日ほどのちの彼女の死は、ほんとうに突然のことだった。彼女も青木恵哉を知る数少ない信徒だった。わたしには、もう会えなくなったひとがいるということがよくわからなかった。昨2014年5月のキリス

---

<sup>24)</sup> 内田守人『日の本の癩者に生れて—白描の歌人明石海人』(第二書房、1956年)の奥付にみえる著者紹介のなかの文言。

ト教霊交会創設信徒の墓前礼拝では急な坂を登るのに足が痛かった、とあとになって聞き、愚かにも改めて、わたしたちにはなんということもない動作が、彼女にはことのほかきつかったのだとおもい知った。彼女の死の重さは、そのおつれあいの深い落胆にあらわれている。でもおつれあいは前夜式で、多くのひとに見送られて妻は幸せだった、と彼女をおくった。その日はとても風の強い一日だった。彼女はわたしたちに2冊の歌文集をのこした。歌をうたうこと、詠むことが好きなひとだった。